

大阪ろうさい クロニクル

第4号

発行日
2023.4.1

ごあいさつ

院長 楽 ぎ ひろ み 宏 実



この度、田内潤先生の後を受けて新しく病院長に就任しました楽木宏実(らくぎひろみ)でございます。まずは私の経歴を含めて一言ご挨拶申し上げます。

私は、昭和59年に大阪大学医学部を卒業し、当時の老年病医学講座(第四内科)に入局いたしました。2年間だけですが、桜橋渡辺病院循環器内科での研修をうけ、急性心筋梗塞と向き合う中、その発症予防に興味に移り、高血圧研究をライフワークにいたしました。高血圧治療ガイドラインの作成にも深く関わっております。また、教室のテーマである老年医学研究においては、幸福長寿を目指してフレイル対策、老化制御の研究に従事してきました。平成19年からは、大阪大学内科学講座の教授を務め、その間に大阪大学医学部附属病院の副院長を6年間経験いたしました。大阪ろうさい病院におきまして副院長としての経験をどこまで活かせるか未知数ですが、職員の皆様方のご支援をいただきながら、これまでの病院の伝統を重んじて地域の皆様への医療を推進できるように努めてまいります。病院職員のみならず、地域の医療機関の皆様、ご来院いただく皆様には、何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、大阪ろうさい病院は、令和4年1月1日に新病棟に移転して、早や1年3か月になります。コロナ禍における船出ではありましたが、田内前病院長のもと、「誠実で質の高い医療を行う」といった基本理念の通り、しっかりと地域の医療に貢献して来たと伺っております。「急性期医療の充実」、「高度専門医療の実践」、「地域医療連携ネットワークの構築」、「勤労者医療の展開」、「安全な医療の推進」、「働きがいのある職場づくり」といった基本方針の推進、ならびに「治療・就労両立支援」への取り組みの充実に向けて、さらなる努力を積み重ねてまいりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

基本理念

誠実で質の高い医療を行い、
すべての方々から選ばれる病院に

基本方針

1. 地域と連携し地域に信頼される急性期医療を行います
2. 高度で安全な医療に全力をあげてとりくみます
3. 患者さまの立場と権利を尊重する医療に努めます
4. 勤労者医療を担ってこれを推進します
5. 働きがいのある職場づくりを推進します



「脳卒中・脳神経内科のご紹介」

脳卒中・脳神経内科部長 **橋 本 弘 行**



いつも患者さまをご紹介いただき、ありがとうございます。

当科は、標榜科名の通り、Common diseaseである脳卒中とパーキンソン病などの神経疾患を診療しております。

常勤医5名の研究分野は、脳卒中について2名、パーキンソン病(症候群)等の神経変性疾患1名、神経筋疾患1名、神経免疫疾患1名となっており、各疾患について深い議論を行いながら日常診療を行っています。

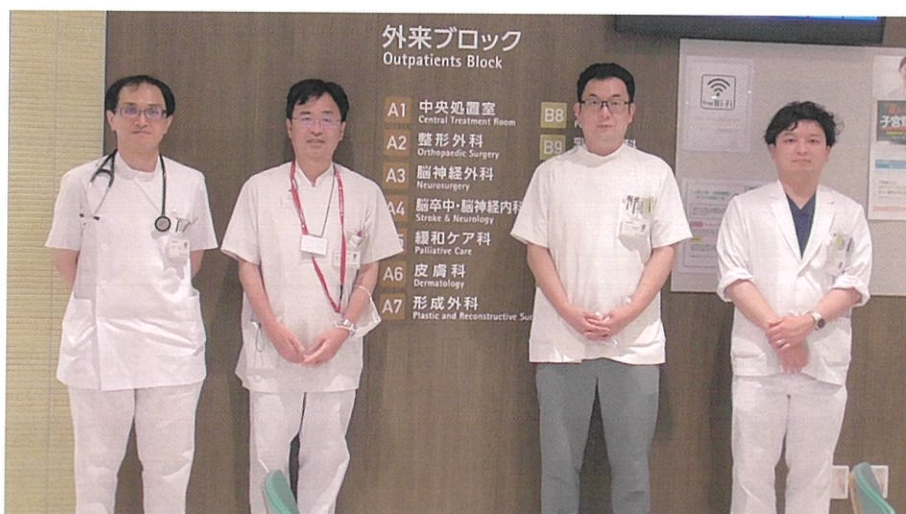
救急疾患である脳卒中は、脳神経外科と連携し診療しております。当院は脳卒中専門医(当科2名、脳神経外科2名)、血管内治療専門医(脳神経外科1名)を擁しています。この1年間では、超急性期治療としてTPA投与14例、経皮的血栓回収治療(カテーテル治療)16例、急性期虚血性脳卒中入院188例、急性期出血性脳卒中(脳神経外科入院)26例でした。2022年1月に開設した新病院においても、引き続きHCU/CCU/SCU病棟に入院していただきレベルの高い医療を提供しております。その他、救急疾患入院として多いのは、てんかん20例などです。

神経難病疾患の中で最も多いパーキンソン病(症候群)については、この1年間では外来患者数125例、入院9例です。その他の神経変性疾患、多発性硬化症、重症筋無力症、末梢神経障害なども、これらの疾患の診療経験が豊富な医師が中心になって専門的な診療を提供しております。(日本神経学会専門医を3名擁しています。)

末尾になりますが、患者さまをご紹介していただいている先生方へ、診察待ち時間短縮のためにお願いがございます。

救急疾患以外の疾患については、外来診察予定日までにメディカルサポートセンターへ診療情報提供書を提供していただけると幸いです。何卒、ご高配の程お願いいたします。

これまで、各曜日とも1名の医師が専門外来を担当しておりました。本年4月より、スタッフが4名(写真)から5名に増員になりました。今後、毎週(水)につきましては2名の神経内科専門医が担当しますので、是非、ご紹介お願いいたします。



診療科紹介 脳神経外科

脳神経外科部長 藤 本 康 倫



脳神経外科は「外科医の目と技を持って」神経を総合的に診る診療科です。

堺市を中心とした南大阪地区には脳神経外科を標榜する病院がいくつかありますが、その中でも当院では患者さまの体に優しい脳血管内治療と内視鏡手術を第一に考え、常勤の脳血管内治療専門医と神経内視鏡技術認定医が専門性を持って診療しています。

1) 脳血管内治療による脳卒中の予防

脳梗塞の予防として頸動脈狭窄症に対するステント留置術や、くも膜下出血の予防としての脳動脈瘤コイル塞栓術などを行っています。

2) 脳腫瘍に対する内視鏡手術

視力低下・視野障害や難治性の肥満・高血圧などを引き起こす下垂体腫瘍に対しては開頭手術よりも鼻の孔を経由する「経鼻内視鏡手術」を、さらには脳深部の腫瘍に対しても低侵襲内視鏡手術を第一選択として行っています。鼻経由の手術では耳鼻咽喉科と、内分泌異常が関係する場合は糖尿病内科とも協力して、内分泌代謝科(脳神経外科)専門医を中心に診療にあたっています。悪性脳腫瘍に対しては手術のみで終わるのではなく、患者さまの状態に合わせて腫瘍治療電場療法や最新の装置による放射線治療も組み合わせて行います。

3) 転倒しやすくなったり認知症症状がでる「特発性正常圧水頭症」に対する診断と治療

見逃されることが多いこの病気の早期発見と早期治療に取り組んでいます。また、この病気はアルツハイマー病など他の認知症との鑑別が重要であり、最近ますます重要になってきている認知症診療の一端を担うため近隣医療機関と協力しています。

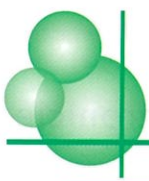
近年の脳神経外科は、診断手段の進歩と手術方法の低侵襲化によって脳の病気の早期発見と予防手術ができるようになりました。当院では、脳神経外科医が担当する認知機能検査も含めた「脳ドック」も行なっています。今後も皆様に「大阪ろうさい病院」脳神経外科を選んでいただけるよう尽力してまいります。



下垂体腫瘍に対する経鼻内視鏡手術



ハイブリッド手術室での脳血管内治療



診療科紹介 産婦人科

産婦人科部長 志岐保彦



産婦人科では、大阪府の産婦人科診療相互援助システム(OGCS)の加盟病院として、府内からの産婦人科搬送依頼の受け入れをはじめ、産科では主に母児のリスクが低い(ローリスク)妊娠の管理、婦人科では良性から悪性まで幅広く婦人科腫瘍の管理・治療を行っています。

また、子宮内膜症のような生涯にわたる疾患に対しても、女性のライフステージに応じて内分泌治療から外科治療に至る幅広い選択肢から最適な治療を提供しています。

女性の社会進出が進んだ今日、良性疾患から悪性腫瘍に至るまで幅広い術式を鏡視下に行い、早期の社会復帰の実現に向けたサポートとなるべく治療を展開しています。現在、当科では日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医が4名在籍しており、良性疾患では80%以上の症例を鏡視下で行っています。婦人科では悪性腫瘍に対する手術が保険適用になって10年近く経過しましたが、当科では早期の子宮体癌および子宮頸癌に対する手術はほぼ鏡視下で行っており、予後も含め、高い治療成績を継続しています。子宮頸癌に対する腹腔鏡下手術では全国の前向き研究での数少ない参加施設となっており、その術式は国内外の学会から高い評価を頂いています(図1、2)。さらに、堺市では唯一、子宮鏡手術が可能な施設となっており、より低侵襲な手術を提供すべく努力を続けています。

子宮頸癌ワクチンでは、当科の田中副部長が推奨再開への提言を英文誌へ掲載し、厚生労働省による推奨再開に寄与しました(図3)。再開後、多数の中高生のワクチン接種が進んでおり、将来にわたる子宮頸癌症例の減少が期待されます。

現在、多数の患者さまを地域の先生方よりご紹介いただき、当科の活動が維持できていることに深く感謝いたします。少ないスタッフながら、安全で質の高い手術を今後も提供していきたいと考えていますので、今後ともよろしくお願ひいたします。



図1 アジアパシフィック産婦人科内視鏡学会
ベストビデオ賞 (2022年10月)



図2 近畿産婦人科内視鏡手術研究会
審査員特別賞 (2023年2月)

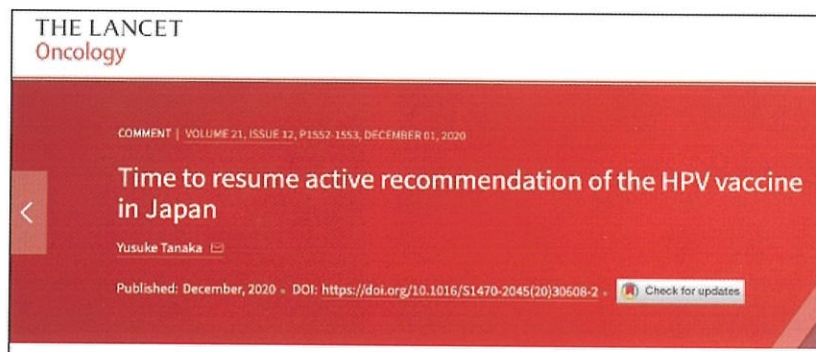


図3 子宮頸癌ワクチン推奨への提言

診療科紹介

小児科～こどもの総合診療科

小児科部長 おかもと なみ



小児科はこどもの総合診療科です。外傷以外のすべての疾患の窓口であり、新生児から思春期までを対象に予防医療と小児内科医療を提供しています。当院では、産科病棟の新生児診察・検査も小児科医が担当しており、見守りやケアが必要な妊産婦については、月1回の合同カンファレンスで出生前から対応を行っています。出生後は、出生時・3日目・退院前に診察を行い、退院後も母親教室や1か月健診・乳児健診でフォローしています。

外来部門は、地域の二次医療機関として堺市内外から紹介患者を受け入れており、他の診療科への紹介窓口の役割も果たしています(外科系疾患や言語リハビリ、心理カウンセリングなど)。また、ワクチン外来では通常の小児対象ワクチンだけでなく、小児の新型コロナワクチンや海外渡航者(成人含む)のワクチンも行っています。午後からの専門外来では、大学病院および同門の先生のご協力を得て、リウマチ・膠原病外来(岡本)、腎臓・血液外来(川村)、内分泌外来(松田)、循環器・心エコー外来(岸)、アレルギー・パリーブズマブ外来(清水)、消化器・腹部エコー外来(難波)を設けています。特に小児リウマチ・アレルギー診療には力を入れており、生物学的製剤/JAK阻害薬治療、食物負荷試験、舌下免疫療法など専門的な診療を取り入れています。

入院部門は一般小児病棟(東8・12床)と新生児病棟(西4・産科と合わせて24床)があり、一般小児疾患(感染症、気管支喘息、川崎病、新生児疾患など)・専門小児疾患(若年性特発性関節炎、SLE、シェーグレン症候群などのリウマチ性疾患、低身長、ぜんそく、食物アレルギー、IBD、ネフローゼなど)の入院精査加療を行っております。

2023年4月から岡本が小児科第一部長で、川村部長は感染症科所属となります。かわいい動物たちに囲まれた新病院の明るいブースにて、新体制のスタートです。





診療科紹介

眼 科

副院長/眼科部長 え み かず ゆき
恵 美 和 幸



新病院に移り一年余りがたち、やっと落ち着いてまいりました。

新病院での眼科外来は広く明るい設計となりスマートな診察が可能になりました。また、眼科手術室は中央手術室に再度統合され、2室が眼科専用で通常の定時手術のみならず緊急手術にも柔軟に対応できるようになっています。

当院の眼科は、主に一般眼科手術のみならず難度の高い白内障手術や網膜剥離、糖尿病網膜症、眼外傷などの難治性網膜硝子体疾患の手術治療を中心に診療をしています。眼科全般を担当するジェネラリストというより、手術を通して貢献できるスペシャリストチームと自負しています。実際、コロナ禍の昨年でも年間約4,500件の白内障手術と約1,100件の硝子体手術を施行いたしました。近隣で眼科手術が制限される中でも、コロナ対策会議のメンバーやコメディカルの方々のご協力で、地域の医療ニーズに応えて手術を継続できたのは良かったと感謝しています。おかげさまで「手術数でわかるいい病院2023－週刊朝日ムック－」では硝子体手術と白内障手術の件数で近畿地区で共に1位、硝子体手術は全国で4位となっています。特に網膜硝子体手術の重症例は全国各地からご紹介を頂きました。今後とも当院の基本理念である「誠実で質の高い医療を行い、すべての方々から選ばれる病院に」の理念に少しでも近づければと考えています。

また、当院眼科は新専門医制度における眼科領域の基幹施設であり、大阪大学のほか他大学とも協力しあいながら後進の育成にも力を入れております。最新医療の導入、難治症例の治療のみならず、医療人としてのバランスの良い人作りこそ信頼される組織づくりの根幹と考え、今後とも邁進していきたいと考えています。今後とも皆様方には当院眼科に対して、引き続き、厳しいご指導とご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。



部門紹介 中央放射線部

中央放射線部長 みょう じん とし あき
明 神 敏 昭



中央放射線部では、新病院移転に伴い多くの検査機器の更新を行いました。それにより、今までより診断価値の高い検査や放射線被ばくの少ない検査を行えるようになりました。このことは患者さまにとって利益が多いことであり、私たちも患者さまに有益な検査が行えることに喜びを感じています。

MRI装置も2台から3台に増設することができました。今まではMRI検査の予約待ち日数が非常に長く、患者さまにはご不便をおかけしていましたが、3台になったことで予約待ち日数が短縮できました。今の画像検査の中でMRI検査というのは、重要な位置づけになっています。MRI検査の予約待ち日数の短縮は、新病院移転時の大きな目標であったため、達成できたことで少しでも患者さまへの貢献ができたと考えています。

CT装置に関しても3台のうち2台を更新し、かなり画質が向上しました。今までのCT装置では少し確認しにくかったものが、より鮮明になり、非常に確認しやすくなっています。

また、今後は被ばく線量の低減を考えています。特にCT検査は件数の多い検査であり、1検査当たりの被ばく線量の低下は年間を通じて考えると大きな低下につながります。患者さまの中には、治療の判定でどうしてもCT検査を年間複数回受けなければならない方もいます。そういった患者さまの被ばく低下を目標として、これから進めていきたいと考えています。

最後に、検査機器が新しくなり、検査機器の台数が増えただけでは意味がありません。私たちが新しい知識への自己研鑽に日々努め、さらなる技術に磨きをかけながら、地域の皆様に安心安全で質の高い画像検査の提供を目指してまいりますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



CT装置 (SOMATOM Definition Edge)



MRI装置 (SIGNA Architect)



部門紹介 栄養管理部

栄養管理室長 さい じょう 西 條 たけし 豪



栄養管理部は、平成28年に大きく業務改革を実施し、丸7年が経過しました。

社会背景としての患者高齢化に伴い、主たる疾患治療と同時進行での栄養障害への介入の必要性が高くなっております。これらに対応するために、管理栄養士業務の主軸を、従来の調理室や栄養管理室で、献立や食材という“モノ”を対象としていたものから、病棟で、患者という“ヒト”を対象とする臨床栄養管理業務にシフトさせました。

現在の管理栄養士による栄養管理業務としては、主に栄養障害リスクの高い患者さまを対象に介入を行い、栄養管理計画を立案し、主治医に相談や提案を行います。栄養管理計画は患者さまへの直接訪問、電子カルテ、他職種との協議などから得た情報を基に、①全身状態の把握、②栄養アセスメント、③治療方針、④問題点抽出と介入、⑤栄養投与計画(経口、経腸、経静脈栄養の内容調整と必要栄養量の算出)などについて検討し、計画立案後は、患者さまへの直接訪問をベースにモニタリングと評価を行います。これらの成果もあってか、管理栄養士は医師や多職種から毎日、多数の相談や依頼を受けるようになり、“栄養管理は管理栄養士に任せている”という声が多数きこえるようになりました。

まだ診療報酬上の加算がない状態で開始した業務改革ですが、その後、早期栄養介入管理加算、周術期栄養管理実施加算や入院栄養管理体制加算(管理栄養士の病棟配置に対する加算、現在は特定機能病院のみ)など、管理栄養士の栄養管理に対する加算は拡大傾向であり、時代が後からついて来ているものと感じております。

元々少数部門であり、まだまだ人員不足の状態であります。しかしながら、今後もこの方向性をさらに強化していきたいと考えています。栄養管理に関して何かお困りの際は、重症急性期から退院時まで、いつでも管理栄養士にご相談ください。



独立行政法人
労働者健康安全機構 **大阪ろうさい病院**

日本医療機能評価機構認定病院

地域がん診療連携拠点病院

地域医療支援病院

〒591-8025

大阪府堺市北区長曾根町1179-3

TEL 072-252-3561(代表)

072-255-8076(メディカルサポートセンター)

FAX 072-255-8203(メディカルサポートセンター)

<http://www.osakah.johas.go.jp/>